

令和6年(2024年)5月11日

防災・安全交付金(道路)事業・国補ダム建設(治水ダム)事業(合併)に伴う発掘調査

かわら 川原遺跡 現地説明会資料

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

遺跡の概要

川原遺跡は、飯田市下久堅地区の天竜川左岸の標高384mの低段丘上に位置する遺跡です。発掘調査は平成28年度、令和4～6年度に行い以下の成果があります。(主な遺構)

- ・平成28年度 竪穴建物跡10軒(縄文時代中・後期)
- ・令和4年度 竪穴建物跡(古墳時代中期)4軒、方形周溝墓(弥生時代後期～古墳時代前期)6基、掘立柱建物跡(古墳時代)1棟
- ・令和5年度 方形周溝墓(弥生時代後期～古墳時代前期)2基、竪穴建物跡3軒、埋設土器6基、配石遺構5基、土坑墓1基(縄文時代後期)



川原遺跡の位置

縄文時代中期～後期(約5,000～3,500年前)は集落が営まれ、弥生時代後期～古墳時代前期(約1,700年前)には方形周溝墓群が造られた墓域に、古墳時代中期(約1,600年前)には再び集落が営まれています。

令和5年度からは、縄文時代を中心に調査を行いました。川原遺跡の縄文時代の特徴は、礫(川原石)が多く用いられていることです。竪穴建物跡では、周囲に礫を巡らせたものや廃絶後に土器や石器と共に大小さまざまな礫を入れこんだものがあります。また大型の礫を半円形に並べた配石遺構のほか、土器を埋納した埋設土器の中に礫が入っているものがあります。礫は石器の材料を含め、大部分が天竜川で採取されたものです。



< 礫を使った特徴的な遺構 >

・配石遺構 (SH22)

半円形に礫が並べられたものです。長さ45～65cmの13個の長方形の礫をやや外側に傾けて立て、その前面(円の内側)に30～40cmほどの円形の礫が9個置かれ、立石の前面を抑えるように置かれています。さらに裏側(円の外側)は立石を支えるように40～50cmの大型の礫が組み、その隙間に小型の礫が入れこまれており、ていねいに組み立てられていることがわかります。中心の方向はほぼ北を向いています。礫の西端から東端(写真左から右)までは3.4mほどで、礫の間や周辺から遺物は出土していません。

川原遺跡の礫を使った遺構の中でも特徴的なもので、飯田地域での明確な類例はみられません。



SH22 前面 (南から)



SH22 後面 (北から)

< 北東北地域との交流の可能性 >

・埋設土器 (SK75)

壺形土器の下半部分が埋められ、その中に上半部分が入っているものです。中に入っている上半部分は、土器の頸部から下を帯状に割ってから敷き詰め、さらにこの上に丁寧に割られた別の土器の胴部破片が置かれ、その上に頸部から口縁部分を置いています。用途については、出土状況から再葬土器棺墓などの可能性もあります。

この壺形土器は、土器の形や口縁部に3つの把手を持つなどの特徴的な形をしています。差異はあるものの北東北地域の「十腰内(とこしない)式土器」に類似するもので、この時期に北東北地域との交流があったことが考えられます。



SK75 土器出土状況



SK75 壺形土器復元



・縄文時代 竪穴建物跡 (上:SB8 下:SB7)

竪穴住居の中央に石を組んで造った「石囲炉」があります。石囲炉は3軒で確認しています。

SB8 は住居の周囲(壁面)に 30~50 cmほどの大型の礫が並べられています。また内側にもあり、二重に配されています。このような明確な礫の並びは飯田地域ではめずらしいものです。SB7 は入り口部と見られる場所に礫が配されています

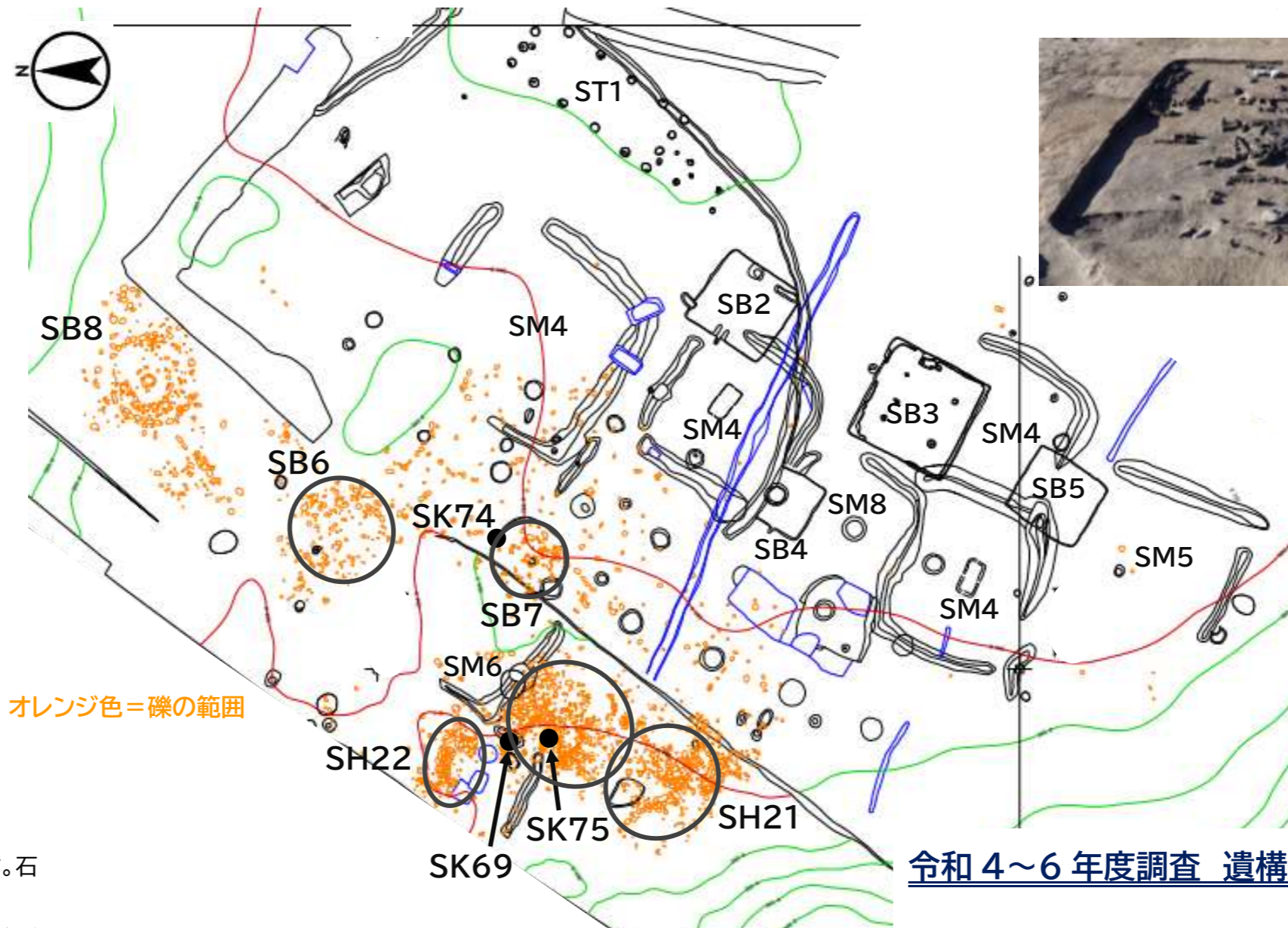


・墓坑 (SK69)

頭部に土器(鉢)を被せて埋葬した土坑墓です。骨は残っていませんが、頭部はほぼ北側を向いています。

・埋設土器 (SK74)

完形の土器が1個体埋納されたものです。埋設土器は全部で 6 基見つかっており、中に礫が入られたものもあります。



オレンジ色=礫の範囲

令和 4~6 年度調査 遺構位置図と主な遺構



・古墳時代中期 竪穴建物跡 (SB2)

竪穴建物跡にはカマドがあります。また、SB3では造りかえたため、カマドが2カ所にあります。

床面には多くの炭化物が広がっており、カマドと炭化物の周辺からは土器が多く出土しています。



・配石遺構と埋設土器

SH22 から SH21 にかけて、南北方向に並んでいます。SH21 は半円形の配石の弧が南、SH22 は北に向いており、その間に北東北地方との関わりのある土器が埋納された埋設土器(SK75)があります。

埋設土器は、2つの配石遺構に囲まれている様に見え、位置や方位が考慮された可能性があります。



・弥生時代終末~古墳時代前期 方形周溝墓群 (SM)

周囲に溝を掘って区画した墓で、同じ溝を共有しているほど密に造られています。規模は大きいもので一辺 12.5mほどあり、すべて同じ向き(南東方向)で造られています。墓の中の人(主体部)は今回の調査では確認されませんでした。

・古墳時代中期 竪穴建物跡(SB)

古墳時代中期の竪穴建物跡は、方形周溝墓の溝が完全に埋まった後に造られています。